



辻元清美の水町航海記

104



イラストレーション/石坂啓

三月二一日、「東日本大震災一周年追悼式」に参列した。

天皇皇后両陛下、野田佳彦総理・衆議長・最高裁判所長官という「三権の長」、岩手・宮城・福島のご遺族代表、世界各国からの代表、国会議員など多数の人たちが東京・国立劇場に参集した。

追悼式での三人のご遺族代表の言葉は圧倒的に過酷な体験からしづらり出された「叫び」だった。岩手県代表の男性は、母親と妻と誕生日を迎えたばかりの四歳の孫を亡くし、この世には神も仏も存在しない、と。宮城県代表の女性は、両親と二人の子どもを亡くし、地獄はここだと思った、生きていることが何なのか、と。福島県代表の中学生は消防団員の父親が殉職し、今は神奈川県の学校に通っている、と。

私も含め、国會議員席からも、すり泣きの声が漏れた。横路孝弘衆院議長はある被災者の言葉を引用し、「過去は変えられないけれど未来は変えられる」。そして、「原子力の未来も使用済燃料の処分を含めて深く深く考えなければなりません」と問題提起した。

ご遺族のみなさんは、全国からの支援に心から感謝し、その絆で生きる意味を見出そうと必死でもがき、希望をつかもうとされている。深い悲しみに恸哭する人たちを無数に抱える日本になつた現実と、政治はどう向き合うのか。一人ひとりの議員が試されている。

しかし翌日、午前九時からの参議院予算委員会で質問者のトップバッター、自民党・参議院政策審議会長の山本一太議員は相変わらず「解散

総選挙に追い込む」とまくし立てた。そこには人間そのものや暮らしへの同じ日の夕方、栗田暢之さんや田尻佳史さんたちと復興庁へ。彼らは全国のNPOなどをネットワークする「東日本大震災支援全国ネットワーク」のメンバーで、福島から全国に散らばる避難者への支援を模索している。その件で私に相談があり、福島の被災者支援担当の松下忠洋復興副大臣と直接協議しようとなつたのだ。

栗田さんはまず自分たちのNPO「レスキューストックヤード」の取り組みを紹介。大震災・原発事故による広域避難者に対し、寄り添い型のパーソナル支援を県と連携して

展開中だ。支援者・避難者・専門家が集まって、公開で課題解決を話し合う場を作るという。

この福島県外にいる避難者の支援は広がっていない。松下副大臣は福島県の副知事と連絡を取つて支援強化を協議することになった。そしてNPOと今後も連絡を取り合つていいとした。そして私は民主党東日本大震災対策本部の福島県対策室長代理に就任した。各省庁の実務担当者と、原子力損害賠償の進捗や福島復興に向けた施策の全体像を点検中だ。

大震災から一年。被災地への思いを風化させず、復興支援を続けていく。それが日本再生につながると信じて……。

(つじもと きよみ・衆議院議員)

追悼式でのご遺族らの「叫び」

